



あ

とがき

東彩織

東彩織は「つくりかた研究所の問題集」の編集長。初年度はスタッフとして、二年目より研究員として主に事務局を担当。研究所の三年間を改めて見つめ、編集を進める。

つくりかた研究所は、つねに「いまあるものを疑う」場所だった。それは、本書に関しても例外ではない。どうつくる、誰が、そもそもなぜ。そんなことばかりが議論になる。本という形態を取る時点で、取りこぼされていくさまざまなものがある。果たして、プロセスを残すにはどうしたらいいのか。ペテラン梓の中野は「つくったら負け？」と書いたが、それはまったくそうで、しかしそういうわけにもいかない。もはや禅問答のようである。つくりかた研究所はつねに矛盾との戦いでもあった。

一方で、本書の編集を進めるなかで、改めて考えたこともある。

世のなかには大きく分けて二種類の人間がいるとする。つくる人間とつくらない人間。長島や中野が書いたように、つくる（プロの）人間にとって、つくりかた研究所のような場所は、ただのやきもきする生温い者達の集まりに見えるだろう。つくる人間はなにか呪いのような、希望のようなものを背負って、つくり続けることを疑わない。だからこそ彼

らはアーティストであり、つくるプロなのだ。

対して、つからない人間にとって、つくることはなんだろう。

本書の編集にあたり、何度も執筆者とやりとりをした。そのなかで、私はしきりに「もっと問題を掘り下げてほしい」と言っていた。そこにはどういう問題があるのか？ 面白かった、大変だった、ということのほかに、どんな問題につながるのか？ しかし、いっこうにこちらの思うような話が出てこないことが多々あった。そしてあるとき、ふと気づく。つからない人間（あえてこう呼ぶ）にとっての問題は、なにかをつくったという事実や、試行錯誤した過去や、そのときの楽しみ、苦しみ、それ自体なのではないか？

つくることは、苦しかったりつらかったりするはずだ。孤独になるかもしれないし、扱う題材は重く闇に満ちていることもある。しかしながらそれは、「プロ」の通例であって、つからない人間（あえて言うなら市民もしくはアーティストではない人びと）にとっては苦勞以上に、つくり上げることそのものの喜びのほうに勝っているように私には思えるのだ。そしてそれこそが、アートプロジェクトが見る「ゆめ」ではなかったか。

つまり私が「問題を掘り下げてほしい」と言うことはお門違いではないか。問題の掘り下げは、こちらから頼んでさせるものではない。本人が問題だと思っているならば自然に掘り下がる。そしてそもそも、同じつくりかたの研究所であっても、私が思っている問題を、

必ずしも他の人が問題と思っているとは限らない。その人にとってはもっと別の大事な問題があるかもしれない。

ここで新たな問題がまたひとつ生まれる。ではその、つくる人間とつくりかない人間が、またはひとつの同じ物事を問題と思う人間と思わない人間が、どうしたらともに一緒にいられるのか。ここでは、「つくる／つくりかない」の二項対立は必要か。

無論、答えは（まだ）ない。ただ、あるとき研究員の大川原は、「つくりかたの研究所は休日だった」と言った。それは、ある者にとっては、本業や日々の生活のなかでの余暇、すなわち休日を使って、なにかをつくる（つくりかたを考える）活動をしていたということ。またある者にとっては、自分のすでもつくりかたを見直す、またはつくることすら休む、精神的な意味での休日だったということだ。つくりかたの研究所は、そんな「休日」という感覚をもって、その問題に近寄ろうとしていたのかもしれない。

問題を解決する最も簡単な方法は、その問題を忘れることだという。つまり、問題を問題として取り上げず、見て見ぬふりをするということだ。その方法はとっても生きやすい。しかしその生きやすさは一体なんだろう。つくりかたの研究所は、多少生きにくくても、問題を見据える選択を採った。この本は、その選択の結果である。